

〈あとがき・謝辞〉

南方熊楠とはいったい何者か——。民俗学者か、植物学者か、粘菌学者か、エコロジストか。彼について調べれば調べるほど、その正体は分からなくなる。そもそも、熊楠に「〇〇学者」などという「枠」を設けることはできないのかもしれない。それほど、熊楠は「振幅」の大きな人物なのである。しかし、だからこそ、さまざまな角度からのアプローチが可能であるとも言える。南方熊楠という人間に対しては、既存の学問の領域を超えた、いわば超領域的（trans-disciplinary）な研究が可能なのである。

筆者の所属する早稲田大学大学院・社会科学部研究科では、「学際的・横断的」ということがしばしば謳われている。熊楠という脱枠的な人物を、既存の学問分野に囚われない方法で研究する——筆者は、これができる研究科が、まさに本研究科であり、また筆者の「智」のバックボーンを養っている場である那須政玄ゼミナールであると考えている。

今回、研究を進める上で、那須教授をはじめ、ゼミ生の皆様からさまざまな意見を頂戴した。毎年9月に行われるゼミ合宿では、厳しくも示唆的なお言葉を多く頂いた。また2010年1月には、今回の論考における最も重要な「終章」を、ゼミナールにおいて発表させていただいた。その際、中間という言葉の使用の曖昧さを指摘された。その後、何度も推敲を重ね〈中間〉と「中間」を使い分けることで何とか整理することができ、哲学的にも一段と深まった論考になったと自負している。さらに、本稿の山場である第6章における「^{パスサージュ}通路」の概念は、2010年9月に行われたゼミ合宿での議論が基になっている。

2007年3月、修士論文を提出するに当たり、那須先生から「修士論文はこれでいいかもしれないが、このままでは博士論文は書けない。熊楠から少し離れてみたら？」と言われた。その後、博士後期課程に進学したものの、筆者の研究はそこで完全に頭打ちになってしまった。博士後期課程一年目は、まさに混迷の時期だった。そこで那須先生の助言通り、少し熊楠から「距離」を置き、ヘーゲルの哲学に真剣に取り組んだ。そうすることで初めて熊楠を、そして今までの自分の研究の在り方を見直すことができた。『精神現象学』の「自己意識」の章を軸にして、博士後期課程二年目の夏に、もがき苦しみつつ執筆した論考（本稿・第5章）は、筆者の暗い道に一筋の光を与えてくれたように思う。

那須先生の助言は優しくも、厳しい。学内論文『ソシオ・サイエンス』の原稿は、毎回

先生の書き込みで真っ黒になって返って来る。博士論文の第一稿を提出した際も、膨大な先生の書き込みがあった。筆者にとってこの書き込みされた原稿は、宝である。ここまで真摯に、一学生の論文を読んでもくださる先生は他にはいないと思う。この場を借りて那須先生、ゼミ生の皆様に厚く御礼申し上げます。

熊楠による夢の記述に関する研究は、2008年、筆者の「南方熊楠 夢の記述に関する研究」が「第一回・南方熊楠研究奨励事業・助成研究」に採択されたことがきっかけである。この研究を行うにあたり、田辺市の南方熊楠顕彰館へは十数回訪問した。中瀬喜陽館長をはじめ顕彰館のスタッフの皆様からは、故・岡本清造氏翻刻の熊楠の日記（1914～1925年）や熊楠の蔵書・書簡などの現物、あるいはマイクロフィルムを毎回快く見せていただいた。また、多忙の中、熊楠邸の縁側で熊弥さんや文枝さんのことをいつも色々とお話しくださった橋本邦子さんの優しいお心遣いに感謝いたします。田辺では、飯倉照平先生（東京都立大学〔現・首都大学東京〕名誉教授）に町内を案内していただいた。昔ながらの料亭などが残る古き良き田辺の町を垣間見ることができた。田村義也さん（南方熊楠顕彰会学術部副部長）には、高山寺・稲荷神社・猿神社などを案内していただいた。また両氏には、本研究において何度も激励のお言葉やアドバイスを頂いた。

2009年には、「ひらめきと創造的活動のプロセス—南方熊楠の「やりあて」に関する考察を中心に—」で、中外日報社主催第五回・涙骨賞及び早稲田大学小野梓記念学術賞を受賞した。本稿・第4章は、同論文が基礎となっている。また本稿において、同論文では書き切れなかった事柄を盛り込むことで、より詳細な考察を行うことができた。

2009年4月～2011年3月にかけて、日本学術振興会特別研究員に採用され、また2011年4月からは本大学で助手に採用されたことは、筆者の研究生活にとってこの上なくありがたいものであった。この間、これまでの人生の中でおそらく最も集中して研究・論文執筆を行うことができたと思う。熊楠流に言うならば、この間、筆者の研究はまさに「灼然と上進」したと言える。

2011年4月から一年間、那須先生が特別研究期間に入り、その間は加藤直克先生（自治医科大学教授）にお世話になった。ゼミナールではレヴィナスの『時間と他者』、『全体性と無限』を講読した。先生の話題は多岐に渡り、その博識には驚かされるばかりであった。

特別研究期間中にも関わらず、那須先生は「院生・教員合同セミナー」及び「中間発表会」には毎回参加して下さった。このセミナー・発表会では、副指導教員の内藤明先生、そして内藤ゼミの皆さまからも多くの示唆的なご意見を頂戴した。また、「中間発表会」には、アメリカ（シカゴ大学）から帰国したばかりの先輩・野尻英一先生（本学・非常勤講師）も参加して下さった。その際野尻先生がおっしゃった「熊楠は『詩的人間』だったので」という言葉は、大変印象深かった。

筆者は、本研究を行うにあたり、紀伊田辺はもちろん、那智山など熊楠に縁のあるさまざまな地を歩いて回った。これは筆者なりの、熊楠へいわば「indwelling」するための方法の一つであった。2010年2月には、ロンドンへ行く機会を得た。ロンドンでは松居竜五先生（龍谷大学准教授）に大変お世話になった。ロンドン大学で行われたシンポジウム「Minakata Kumagusu and London」に参加し、小峯和明先生（立教大学教授）、奥山直司先生（高野山大学教授）、松居先生、田村さん、アントニー・ブスマールさん（Antony Boussmart フランス極東学院図書館副館長）の研究発表を聴講し、またディスカッションにも参加することができた。松居先生の案内の下、大英博物館やビクトリア・アンド・アルバート博物館（旧南ケンジントン博物館）の図書館を見学することもできた。とりわけ熊楠のロンドンにおける二番目の下宿（五年間滞在）を訪れた際は、非常に感慨深いものがあつた。

ロンドンには伝統のある建物があつた。百年以上の建築物などざらにある。熊楠が滞在していた頃あつた建物も当然多く残っている。熊楠が歩いたであろう道を歩き、熊楠もきっと見たであろう景色や建物を見、熊楠が勉強した図書館で年季の入つたパルプの匂いを嗅ぎ、また熊楠も飲んだであろう下宿前のパブで Beer を飲み……、このようにして筆者は、ロンドン時代の熊楠の空気を、多少なりとも感じることもできた。筆者にとって、ロンドンを訪れたことは、熊楠を内側から知る上で、非常に有益であつた。

筆者は、学部を卒業後、一般企業に入社した。その後一念発起し、研究者への道を志し本学・本研究科に入学した。崖っぷちからのスタートとなつた。父や母は、「自分の道は自分で決めなさい」と言い、三年間勤めた企業の退職については、一切反対しなかつた。兄

は「自分の一番力の発揮できるフィールドで戦え」と励ましてくれた。勿論、勤めながら大学院に通うことも可能だったかもしれない。しかし、「保険」はかけたくなかった。もう七年以上前になる。今では「大胆な決断をしたものだ」と思う。しかし、会社員という立場を離れてみて初めてその立場のありがたさも堅苦しさも知ることができた。今までの人生の中で、最大の決断だったが、那須先生に出会い（全てはそこから始まった）、多くの友人（先輩・後輩）に恵まれ、そして家族に励まされ、ここまで来ることができた。

筆者は、本稿で二つの成果を上げることができた。一つは熊楠の夢の記述に関する「データベース」を作成したことである。この「データベース」の用途はさまざまである。特に今後、熊楠の深層心理の研究、あるいは精神医学的な研究を行おうとする人々に少しでも役に立てば幸いである。もう一つは、南方熊楠という「Extreme Person（極端人）」に、哲学・心理学・史学的なアプローチ、言い換えるならば超領域的（trans-disciplinary）なアプローチの可能性を示したことである。このようなアプローチ方法はおそらく今までにはなかったものであり、しかしながら熊楠という「巨人」を捉えようとする際、最も有効な手段でもある。さらに、〈中間〉という、おそらく人間の「在り方」を考察するための、もっと言うならば哲学的思索のための、絶対的な条件とでも言うべきものを、南方熊楠の思想を通じて、明らかにすることができた。——それは、我々にとって、最も近いが故に最も遠いものを考究するための、いわば「前提」でもある。

論が解体することなく何とか「終章」まで辿りつけたことは、筆者自身の努力のみならず、当然さまざまな人々の援助と励ましがあったからであることは間違いない。

ここに、ご支援・ご協力・ご指導くださった全ての皆様に、厚く御礼申しあげます。

2012年7月

唐澤 太輔

「中間」と〈中間〉

—南方熊楠 夢の記述に関する研究／「やりあて」と関連させながら—

早稲田大学大学院 社会科学研究所

地球社会論専攻 生命倫理学研究

唐澤 太輔 (Taisuke Karasawa)

2012年7月